



テレビや漫画雑誌が普及する前、子供たちの心をつかんでいたのが、「黄金パート」などの街頭紙芝居だ。自転車の荷台に積んだ木製の箱が紙芝居の舞台。どこからともなく集まってきた子供たちが目をこらす中、紙芝居のおじさんが得

おりする「公園で子供たちとやり取りするのが一番楽しい」と話す大塚さん(左)と藤井さん(右)。大阪市西成区の「おとぎ紙芝居博物館」を1日5着作れるほど

街頭紙芝居

意の話術で物語を盛り上げる。わずかな小遣いで買うあめ玉や型抜きなどの駄菓子も楽しめた。紙芝居の全盛期は昭和20年代後半から30年代初め。戦後、失業者の受け皿として人気を集め、大阪だけで15000人の紙芝居師がいた。

絵元は、紙芝居の原画を画家に発注し、業者に貸し出すプロダクションのような存在。駄菓子の製造卸も兼ねていた。「最盛期には、新鮮だ。しかも絵の状態が驚くほどいい。傷んで戻っ

おおさか 新発見

問題

戦後、子供たちの間で一大ブームとなった街頭紙芝居。高度経済成長や娯楽の多様化によって衰退し、紙芝居師の数も激減しました。紙芝居の絵を制作し、業者に貸し出す絵元の多くは廃業しましたが、現在も活動を続けている絵元があります。それは何軒でしょう？

- ①1軒
- ②10軒
- ③50軒
- ④100軒

(想定問題)

「なにわなんでも大阪検定」

奇想天外な物語多く大人も魅了

古い日本家屋の扉を開けると、そこには昭和の風景が広がっていた。所狭しと並ぶ紙芝居の大半は全盛期に描かれたもの。中には手塚治虫の師匠やSF画の巨匠の絵も。鮮やかな色彩と迫力あるリアルな描写は今のアニメとも違い、なぜか新鮮だ。しかも絵の状態が

もうかったそうです」と話すのは、紙芝居師の大塚珠代さん。全国で唯一、存続する絵元「三邑会」の運営に携わり、三十数年間、紙芝居の世界を見続けてきた。その三邑会を設立し、戦後、紙芝居文化の普及に貢献したのが、故塩崎源一郎さん。面倒見のよかつた塩崎さんは「紙芝居屋が後々困らないように」と、自宅に2万巻もの作品を所蔵。平成12年に他界した後も、会のメンバーにより「塩崎おとぎ紙芝居博物館」として運営されている。したがって正解は①。

懐かしい紙芝居を見に、大阪市西成区の紙芝居博物館を訪ねた。古い日本家屋の扉を開けると、そこには昭和の風景が広がっていた。所狭しと並ぶ紙芝居の大半は全盛期に描かれたもの。中には手塚治虫の師匠やSF画の巨匠の絵も。鮮やかな色彩と迫力あるリアルな描写は今のアニメとも違い、なぜか新鮮だ。しかも絵の状態が

博物馆は毎月第4土曜のみ開館(予約制)。昭和生まれの子供たちにも響く紙芝居の世界に一度触れてみてほしい。

(ライター 橋長初代)

てきた絵も、塩崎さんが手入れや補修をし、大切に管理していたからという。大塚さんたち会員は、ここで紙芝居を借り、保育園や老人ホームなどを回っている。「紙芝居は対話なしに成立しない世界。公園の子供たちは一番シビアな観客ですが、ツッコミを入れながらやり取りするのが一番楽しい」と話す。

紙芝居的魅力を発信しようと、活動を始めた人もいる。紙芝居師の藤井一さんは、北新地のバーなどでお酒を飲みながら紙芝居を楽しむ会を主催。自慢の声と話術を生かし、ライブ感あふれる公演を続けている。

「紙芝居には奇想天外な物語が多く、大人でも楽しめます。演じることで記憶の資産として残していくたい」と藤井さん。